

△対談▽

## 宗教における魔・悪魔の問題（上）

西谷啓治  
阿部正雄

長期の講義に出掛けたりしましたために、書き上げるま

でに前後三、四年ほどもかかってしまいました。しかし、自分なりに現在この問題について考えているところ

を、一応その結末まで書いてみたわけなのです。

この問題の起りは何かといいますと、私がそれ以前の時期にもつておりました真宗の信仰が、久松先生との出会い、特に学道道場<sup>(2)</sup>での久松先生との参究を通して、最終的に崩壊してしまったということを契機として起こってきたわけでした、真宗でいわれる「よろずのこと、みなもて、そらごと、たわごと、まごとあることなきに、

ただ念仏のみぞまことにておはします」という、そういう意味での宗教的な真実さえもが、なお虚偽ではないかということが、信仰の崩壊を通して私に非常に強く出てきたわけです。信仰の道におきましては、世間的なこと、この世的なことは、一切そらごと、たわごとであつて、まことがない、という世間虚偽の自覚、深い虚偽の自覚を通して「念仏のみぞまことにておはします」という正信念仏の立場に帰入するのであります。そのような念仏信仰の立場が崩壊しました時、まことと信じられたその念仏さえもが虚偽だったということが、いや忘なしに私に自覚されきました。それは単に念仏はまことでない、というのではなく、念仏はたしかにまことであるが、それはまことのままで嘘だという自覚であります。

それは、この世的にも、あの世的にも、つまり内在的にも、超越的にも、真実はありませんという、一切虚偽の自覚であつて、そのような意味での一種のニヒリズムだつたと思います。

そういうところに立ち至つて、私は「神は神聖な嘘である」というニーチェに非常に共鳴をおぼえたわけです

が、そういう意味の一切虚偽の自覚というものが、さらに私のなかで「魔の自覚」というものにかわってきたといいますか、あるいは深まってきたわけです。それは私にとり必然的な歩みであったと思います。といいますのは、真宗的な信仰にめざめた時、私どもは「本願を信せんには他の善も要にあらず、念仏にまさる善なきゆへに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきゆへ」として、善惡を超えて「念仏者は無礙の一道なり」という、善惡から自由になつた信仰生活を生きるわけですが、そういう自分の信仰生活そのものが、私には、なおより深い意味において虚偽として自覚されてきたわけです。

そして、その時、自分はそういう信仰の名において実は魔の生活をしていたのではないか。善惡から自由である無礙の一道を生きるということにおいて、私自身は実は、魔を行じていたのではないかということに気付いたわけです。なんとなれば、魔もまた善惡を超える魔から自由でありますから、その限り信仰の道と魔の道は相表裏するところがありますから。そういう形で、一切虚偽

の自覚は、より実存的主体的には、魔の自覚へと深まつてきたわけです。そこで魔という問題が私にとり、非常に切実な、自分の存在全体にかかる問題になつてきました。ですから、魔といい悪魔といつても、それはなにか私の外にあるものではなく、また禪でいう魔境といふようなことでもなく、私自身が魔であつた、自分は信仰の名において魔の生活をしていたのではないかといふ自覚、そういう、いわば、「魔の自覚」ともいうべきことが、私にとつて非常に大きな問題になつてきました。

それ以来ずっとその問題を抱えて、道場で坐禪をし、久松先生との参究を重ねてきたわけですが、そこで私がいくらかでも明らかになつてきましたことは、久松先生が身をもつて体現しておられる無相の自己に照してみれば、正信念仏において、如何に阿弥陀仏と一体となるといつても、その阿弥陀仏には普通の意味の相ではないが、なお一種の透明な相があり、したがつてまた信仰においてそれと一体となるという自己にも、なお相ならぬ相があるということでした。このことの自覚が、まこと

なる念仏さえもが虚偽であるという自覚になつたわけです。そしてそのような虚偽の自覚を通して阿弥陀仏の立場を突き抜け、阿弥陀仏の背後へ自分が出てしまつた時、そこに見出したものは、一切の生命が、仏の生命さえもが、死に絶えた絶対虚無の世界でした。阿弥陀仏の背後に開かれているのは虚無の深淵です。そしてこの阿弥陀仏という報身仏の背後に開かれた虚無の深淵にひそんでいるものこそ魔であります。阿弥陀仏のような人格神を信ずる者の眼には、魔のさだかな姿は見えませぬが、そのような人格神的立場がこわれた時、その背後にひそんでいた魔は、ぬつと姿を現わし、自覚化されます。しかし問題を手短かにいいますと、ここに自覚される魔にも、なお一つの相があります。仏ではない魔という相があります。したがつて魔の立場をも超えたところで行かなければならない。仏のみならず、魔も脱落する。そういうことが坐禪を通して自分にもはつきりしてきたわけです。仏にも非ず、魔にも非ずという非仏非魔の、自覚を介して初めて、一切の相をはなれた無相の自己が自覚される、その間の問題をこの論文で扱つてみたわ

けです。

いま申しましたように、魔の自覚といいましても、私の場合、いままで自分は信仰の名のもとに、実は魔の生活をしていたのではないか、というふうに、過去形で魔の問題が出てきてたわけですが、これはむしろ当然のことではないかと思います。といいますのは、元来魔というものは、ポジティヴに現在形では存在しないものではないかと思います。魔はいつもネガティヴな形でのみ存在するものであって、現に自分は、魔であると現在形で自覚されるのではなく、むしろ自分は魔であったと、過去形ではじめて自覚されてくるものであると思います。

したがつてそういう魔の自覚に至つたときには、すでに半ば魔を超えたところもあつたといえるのではないかと思いますが、そういう魔も最後に何らかの形で脱落してしまつて、仏でもなく魔でもない、正に非仏非魔というところにほんとうの無相が現成する——そういうふうに私は思われるのです。

そういう自分の体験をもとにして考えていくと、淨土教と禪、あるいはキリスト教と仏教というものの間

の問題も、一面これらの宗教は二つの違つたタイプの宗教であるとして、両者の相違をふまえてダイアローグを

すればよいというだけではなくて、同時にその相違を超えて両者のより深い根もとを窮めるということがどうしても必要になつてくると思います。その場合には、神または報身仏の裏にひそむ魔という問題、それから仏教的、禪的無にかかる魔の問題——それについては、今こりでいう暇がありませんが——に出くわすことなしには、これら二つのタイプの宗教の枠を破つて、そのより深い根源に入つて行くことは出来ないのでないか、既成の両者を超えたいちばん徹底した宗教的自覚に立つことはできないのではないか、そう私には思われるのです。その意味で魔の問題、そしてまた、仏にも非ず魔にも非ず、神にも非ず悪魔にも非ず、ということが、宗教的自覚の徹底ということにおいて、どうしても不可欠な問題になるのではないか、そういう気持ちで「非仏非魔」というこの論文を書いたようなわけです。

それで、はじめのほうに、親鸞やパウロなどに代表される信仰の立場において、どういう意味で魔ということ

が問題になるかということ、それから、禪などで代表される悟りの立場で起こりうる魔の問題を多少とも詳しく考察しまして、そして最後には、そういう二つのタイプの宗教に相通するより深い宗教的自覚を問題とし、その場合、もし信仰の立場に立つ宗教を神の宗教とよび、悟りの立場に立つ宗教を無の宗教とよべば、神の宗教と無の宗教の問には、直接通ずる道はありえないのです。

註

(1) 阿部正雄「非仏非魔——宗教的自覚における魔の問題」(玉城康四郎編『仏教の比較思想論的研究』東京大学出版会刊所収)。

(2) 学道道場は、京大仏教青年会を改組し久松真一先生を中心昭和十九年四月に結成された求道的な学生の集りで、坐禪、論究、相互参究(僧堂の参禅にあたる)を行い、その後FAS協会と改称。眞実の自己の自覚より世界と歴史の革新を願う活動を行つてゐる。

西谷先生もずっと以前から西洋の神秘主義の問題などを深くおやりになつておられ、とくにヤコブ・バーメなどに悪魔の問題が出ておりますし、その後先生のお仕事の大體底した立場に立ちうるのではないか、そういうのが大体この論文の趣旨なのです。

西谷先生もずっと以前から西洋の神秘主義の問題などを深くおやりになつておられ、とくにヤコブ・バーメなどに悪魔の問題が出ておりますし、その後先生のお仕事の

まり仏と魔とか、更には非仏非魔とかいわれる事柄のいちばん根本の、原理的なところを話されたわけですね。山でいうと頂上に当るところでしよう。それが、もちろん最も重要な点ですが、同時に仏といい魔といつても、それは山の全体に關係している問題で、そこには非常に広い裾野がある、というのは、「世界」の全体ということもいいし、ありとあらゆる「事物」といつてもいいが、そういうものと連関している問題ですね。仏とか魔とか、西洋だと神とか悪魔とかという問題は、たとえば自然の世界、自然の限りなく多様な事実とか現象とか、それから歴史上の世界とそこで諸事実・諸現象とか、すべてそういうことのうちに貫徹しているものと考えられている。神も悪魔も、世界のあらゆるところに顔を出している。それも、大抵の場合は覆面してですが、時には、今お話しになつたように、魔が仏の面をかぶつてということも起るし、時には仏が魔の面をかぶつてといふこともないとは限らない。たとえば禪の非仏非魔というのは、仏にも魔にも自由に入れるということのようだから、そういうこともないとは限らない。ともかく、

人間は自然や歴史の世界を背景にしていて、仏も魔もその世界と連関して居り、その世界全体が人間の内面に畳み込まれているわけです。

ところで現代では、ニーチェの言葉でいえば「神は死んだ」ということで、神が世界の全体を支配する絶対的な力というものを失ったというか、そういう絶対者としての「神」というものが考えられなくなつたという状況があつて、それがニヒリズムといわれている。これはキリスト教ばかりではなく、ほかのあらゆる宗教の上にものしかかっている問題ですね。儒教なんかの場合なら「天」、老莊だと「道」というものがなにか宗教的な性格をもつて考えられていたわけですが、近ごろでは「天」といつてももうひとつ実感が湧かない。そういう状況が現代あるわけだけれども、それにしても、そういう宗教的な絶対性の原理の欠落といふか、絶対的な根元の日蝕状態といわれるようなこと自身が、やはり神とか仏とか天とかいわれたものの裏返しのようなことで、ニヒリズムの問題というのは、神や仏ということの前提なしでは現われてこない。そういう問題ですから、これは反宗教

的とか宗教否定とかいいながら、やはり宗教に含まれている根元的な、原理的なところでの対決で、たとえば「世界」というものの根元には何があるか、その世界のうちに生存する人間の、乃至は自己の存在の意味はどこにあるかというような問題に係わつたものです。その意味でニヒリズムも問題の広さとか深さということでは、宗教と共通ですね。

そういう非常に広い裾野をもつた、あらゆる問題に係わつてゐるという一面が、今の問題はある。それで、あなたのいわれた対立原理としての、仏に対する魔、キリスト教の場合でしたら、神に対するデヴィルとか、サタンとかいうものについても、同じことがいえるわけですね。やはり問題が全面的に出てくるということですね。

そこで魔ということが問題になる場合、あなたが取り上げられたのは、宗教プロパーの領域、しかもいちばん頂点的なところでの仏と魔という形においてだといえますが、そのところで魔という問題を非常に掘り下げ、突きつめられた結果打ち出されてきた事柄、さつきのお

話にあつたような事柄ですね、それが今いつた広い裾野のいろいろな領域をなすところへどういう形で波及していくのかという、そういう問題が一つあると思いますね。現代では悪魔とか魔ということは科学の領域では全然問題にならない。自然科学の諸分野でも、社会的・歴史的な諸科学の領域でも問題にならないわけです。日々その言葉が比喩的に使われることはあつても、本来の実証的な思考の文脈のなかでは、その言葉は無意味になつてゐる。その影響で、一般の人も、昔の人間が信じたようには悪魔や魔の実在を信じてはいない。しかし文学の領域とか社会評論や政治評論の領域などになると、その言葉は既に象徴的な意味合いを含んで来て、ずいぶん頻繁に使われています。イデオロギー的思考などでは、敵方のすること・なすことが要魔の仕業と映るらしい。実際にまた、現代政治の領域では戦争や紛争やテロなんかには、「魔」や「悪魔」が象徴的な意味をもつてくるようなところがあるし、一般社会の世相のなかにも、そんな現象がいくらでも発生しているわけです。そのほか、全く別な方面ですが、現代流行のオッカルティズム

に乗って、「魔」がいろいろなところに、いろいろな形で隠頭しつつある。特に精神分析というか精神医学といふか、とにかくその学の対象になる広い分野では、「魔」という言葉の象徴力は無視できないのではないかと思ひます。要するに、現代世界の政治・社会・倫理や心理などいろいろなところに「魔」が顔を出している。神や仏の影が薄くなるというか、日蝕や月蝕の状態になると、いうに比例して、魔の影が濃くなってきたという感じさえします。

しかも、それだけではない。さつき科学の領域では魔といふものは問題にならないといったその科学のことですが、そういう科学の立場自身が、その立場を一部分として含む全体の立場から見ると、根本のところで「魔」の問題と絡み合っているといえなくはない。たとえば核兵器のそもそもの出現やその進歩・発達には自然科学が原動力になっている。その発達が推進されて行く根本には「魔」的としかいふ様のない暗い力が感ぜられる。自然科学の本質が自然界の真理を探求するところにある限り、科学それ自身はその「魔」には係わりないと見ることはいえ

ますが、科学者自身は本質的に、つまり人間である限り、それとの係わりのうちにあり、魔の問題には与かり知らぬと済ましていることは許されない。科学する人間である限り本質的に係わりないが、科学する人間である限り本質的に係わっている。そして「科学する」という時の科学的思考の自發自展的な活動と、科学する「人間」とは切り離せないから、この両面は一つの自己矛盾です。科学するという純粹活動は、たとえば核兵器の成立における根本の力として「矛」の面とすれば、科学者という人間は「盾」の面です。仮にも魔にも本来係わりない科学が、人間を自己矛盾に陥れるという、まさにその点が「魔」の現われであるわけです。核兵器もそうですが、それと同じように人類の破滅にもなるかも知れぬ危機的なものが、「生命科学」の発展にも潜んでいるとわれます。それらは、魔が科学という現代の花形を自分の覆面にした、その最も現代的な現われと見ることも出来ます。

科学と結びついたこの問題は、旧約聖書にあるアダムの「原罪」、つまりサタンに誘惑されたアダムとイヴが

神の楽園から追放されたという説話の問題と、肩を比べるくらい重要な問題です。

いま話したことは、魔の問題としては、裾野の広がった辺りの事柄です。しかし、さつきのお話にあつた魔についての新しい問題提起が、根本的であればあるほど、他方では、それが裾野の問題にまで波及させられた場合、どういうことになるのか、現実のいろいろな問題がその新しい視野のもとでどう考えられてくるかといったような、そういう方向のペースペクティーヴも同時に必要かと思います。それによって、あなたの出された思想の意味も一層はつきりしてくることがあるんじやないか。そういうことを一つ感じました。

### 三、キリスト教の悪魔と仏教の魔

西谷 それから、ほかにもいろんな問題が含まれていると思いますが、お話をなかに出て来た仏教の宗教的な性格とキリスト教のそれとの違い、タイプの違い……。

阿部 悟りと信仰というふうな……。

西谷 それは仏教のなかで禅宗と真宗とで代表される

ような違いですが、それをもっと広く見ると仏教とキリスト教との間でも考え方の異なる問題ですね。いままでの歴史のなかでそれを問題にすると複雑で面倒なことになりますが、さし当り魔の問題との連関で考えると、魔という問題は、とにかく善と悪ということに結びついているわけですが、伝統的なキリスト教はその点で非常ににはつきりしていて、善なる神に対する悪魔といふことで、善と悪とを分けると魔は悪のほうを代表している。もちろん仏教にだってそういう面があつて、魔といふものは大抵の場合、仏と対立的なものと見做されている。そしてやはり善悪という対立がそれに結びついている。しかし仏魔の対立と善惡の対立とは、キリスト教のように本質的に、原理的な意味で結びついているのとは違う……。

阿部 単に倫理的な意味合いのみでもないということですね。

西谷 仏教だけでなく、一般に東洋ではそういう傾向があるんじゃないですか。たとえば魔にも、悪い魔もあるが善い魔もあるというふうに。

阿部 なるほど、そうですね。

西谷 あれは神変大菩薩でしたか、修驗道の……。

阿部 聖護院などの修驗道の……。

西谷 つまり、役の行者ですね。あの役の行者には、お供によたりの小さい鬼がいる。その「鬼」というのもキリスト教のサタンとかデヴィルとかと性格がすっかり違っている感じです。なんとなくいたずらっ子がわるさをするというような、どこか無邪気なところがある。鬼という言葉では言われていますけれども、その意味が大分ちがう。従つて魔という言葉で象徴されるものも大分違った性格のものです。

阿部 天邪鬼みたいなのですね。

西谷 そう。だから魔ということについてのセンスが東洋では違う一面がある。西洋の世界でも、あなたの論文にも出て来た das Dämonische という場合のデーモン、その源になるギリシアのダイモニオンは、倫理的な意味での魔の性格はないですね。もともとギリシアの世界にはそういう意味の悪魔はない。ただ何となく超人間的な力をもつたもの、人間の知識や行動や技術などの能

力が先天的に含んでいたり超えたような能力をもつたもの、つまり知識の規則としての論理とか、行為の規則である倫理とかに拘束されない力、東洋でいう「神通力」をもつた存在、それがデーモンで、それは真とか偽とか、善とか悪とかの差別を超えていた。或いはその差別以前で未分ですが、しかしそれだから悪いということではない。むしろニュートラルな、中性的な性格ですね。そういう意味のデモニッシュというものがあって、それも魔ということになる。

要するに、魔という言葉にはそういう複雑さがありますね。仏教で魔という場合、根本にはそういう性格がある。たとえば仏教で魔道と外道というでしよう。これは仏教からいうと結びついている。それで魔外として一緒に問題にしたわけですね。外道というのは仏教以外の教えで、それが仏教からいうと悪い偽りの道だということになる。しかし、それだから外道は悪魔の教えだ、とまで考えたかどうか。

阿部 「魔界外道も障礙することなし」などといいますね。魔と外道をよくいつしょに扱っておりますね。

西谷 キリスト教では外道は paganism 異教ですね。

異教というのはやはり間違った悪い教えなんですが、そ

れがキリスト教では一直線に悪魔にまで行く傾向がある。キリスト教の信仰に熱心になればなるほどそうなる。キリスト教の内部で正統の信仰から外れた異信仰、つまり異端（ヘテロドクシー）は、なおさら憎まれて、悪魔と結びつけられる。仏教では異教はもとより、同じ仏教内の異端でも悪魔ということまでは行かんと思いませんね。魔ということまでは行くとしても、だから、異端者を広場で焚き殺したりしない。魔女狩りもないし、インカを絶滅したりすることもない。

阿部 裁きの意味での悪魔とはいわぬ……。

西谷 魔とはいっても、悪魔とまではいわない。いつも根本に寛容さがある。キリスト教だと、聖書なんかを見て、血を見るところまで行くというきつさが感ぜられます、仏教では魔外を教えて仏教に帰せしめるという方に重点が置かれている。その辺についてもやはり魔というものについての感じ方が違う。そういう一種のニュアンスの違いみたいなことも、問題にしていくべきじ

やないかと思いますね。

阿部 それは大いにありますね。

西谷 そういう意味で、仏と魔という対立概念に立てられたときに、魔というのは、あなたの場合どういう性格をおもに考えられたか。むつかしい面倒な問題だから何ですけれども。

阿部 この論文でも悪魔と魔を多少使い分けたのですけれども、それを十分はつきりとさせなかつたのです。悪魔といえば、どうしても神に対する悪魔ということになつて形の上ではキリスト教的な悪魔をさすことになります。これに対して魔といえばいきおい仏に対する魔ということになつて形の上では仏教的な魔をさすことになります。このような使い分けは単に形の上だけではなく、あとで話する機会があるかと思いますが、内容的にも重要なちがいをさすわけで、それをはつきりさせることが大切なのですが、この論文では、一応仏教とキリスト教をよまえながら、問題を広く人間の宗教的自覚の問題として捉えようとしたので、いつも形式的に仏教の場合、キリスト教の場合というふうに分けることが出来な

い場合がしばしばあり、そのような場合には、はつきりと使い分けることに、むしろ困難を感じたわけです。けれども、もちろんおっしゃるように、魔とは何をさすのか、その性格をはつきりさせることは、むつかしくても是非必要なことです。

西谷 あなたの問題とはちょっととずれた問題かも知れませんね。だけども、魔ということを問題にしていくと、結局そういう……。

阿部 それは私も感じておりますね。

西谷 たとえばさつきのお話にあったたよな、仏の信仰といふことであつても、それは実は魔を行することだといわれた場合、魔といふものの性格如何によつて、いわれた言葉の響きがちがつてくるという事はありますね。響きといつたのは、仏とか信仰とか、魔とか行するとかいう一々言葉のつかい方の問題だけでなく、その話全体の意味をどう理解したらいいかという問題です。それからまた、さつきいった裾野の拡がりにまで波及する形で問題にする時、魔なら魔という概念の意味内容の違いが大きな問題になつてくる。

まだいろいろな問題があると思いますが、かりに今いつた二つの点についていつてみました。一つは魔の問題を見る視野について、もう一つは魔という言葉の意味についてです。

#### 四、魔の問題の内面性と理性の自律

阿部 最初におっしゃつたことですね、もっと広い裾野が神と魔といふ問題にあるのではないかということが、これは私もまったくそうだと思います。人間の宗教の歴史を見ますと、未開人の宗教でも必ず何か神的なものと魔的なものが出てきますし、神話のなかでも必ずそういう二つのものが出てくる。日本の民俗信仰なんかでも、神さまと鬼やナマハゲのようなものが出てくるし、それから神信心のほかに魔除けというようなこともついてまわつてゐるわけですから、おっしゃるようないくつもわつてゐる面でも、あらゆる面で、神と魔が入り混じつてといいますか、絡み合つてゐるので、何か魔的なものが出てこない場面はむしろないといつていいほどですね。

西谷 今じつは吉田山を越えてここに来たんですよ。

そしたらこの月の四日ですか、吉田神社の節分がはじまるので、もう売店なんかをさかんにつくつてゐる。吉田神社は京都の節分では一番中心の神社で、百万人くらい人出がある。あの祭りの中心は鬼やらいで、だからにか赤鬼・青鬼が出てきてあばれるのを、武者の格好をした者が追い払うという儀式ですね。これはほかの神社でも行います。あそこに出てくるのは鬼ですね。さつき言つた役の行者のお供も鬼です。

阿部 善魔という言葉もありますね。

西谷 あります。魔ともいえるんじやないかな。神社のお札なんかでも魔除けのお札といいますね。ところが、あれに似た祭が西洋にあるんです。写真で見ただけですが、イスの何とかいう村で、その時は観光地になるらしい。出てくるのが日本の鬼と似ているのでびっくりしました。あれは多分キリスト教の以前の……。

阿部 ゲルマン的なもの……。

西谷 デルマン的かケルト的か、とにかくそういう時代のものですね。そういう古い時期のものでしかも現在

なお日常生活と結びついているものがたくさんある。

阿部 日常的な生活から庶民生活の隅々まで、そういう神的なものと魔的なものと両方がしみ込んでいるということは、よく気をつけてみれば、たしかにあると思います。

西谷 追儺式の鬼、怨霊、祟りの神、もののけ……。

阿部 そういう非常に広い裾野をもつて、何か魔的なものが人間生活のあらゆる面にかかわつてゐるということは、たしかにあると思いますね。そしてそういう場合に、悪魔とかデーモン的なものは、なにか外にある悪い存在で、一種の人格性といふか、何かそういうものをもつたものとして、人間に働きかけてくる。神さまを押しのけて人間を悪いほうへひっぱつて行こうといふ形のものになつてゐると思うのですが……。キリスト教のサタンとかデヴィルというようなものも、聖書なんかを見る

と、やはりなにかわれわれの外にあってうごめいているようなものとして描かれていて、いわば神話的に表象されています。それから未開宗教や民間宗教でいわれている悪魔的なものも、たしかにそういう形のもので、悪魔

いか。その場合にいちばんつきつめたところでは、自律的な理性との絡み合いにおいて、神信仰ないしは空を悟るということが貫徹されようとする時、魔の問題が出てくるのではないかと思うのです。そういう現代から今後に向かってのわれわれの宗教的自覚の問題という意味で、魔の問題が避けられない一つの重要な問題になつてくるんじゃないかな。そのひろがりといふことも、おつしやるような日常生活の万般にまでそういう問題がずっと浸透しているといふことも考えなければならぬと思うのですが、現代に生きる人間としてわれわれが自らの宗教的自覚を深めていくこうとする時、自律的理性との対決を通して魔の問題は何よりも避けることができないといふ意味では一つの普遍性をもつた問題ではないかと思うのです。つまり宗教における魔の問題というのは、なにも一つの特殊な問題とか、あるいは私だけの問題とかいうものではない。むしろ私としては非常に普遍性のある問題だということがいいたいわけなのです。

## 五、中心から周辺へ、周辺から中心へ

に取りつかれるとか、魅入られるとか、というふうにいますね。現在でもまだ魔的なものは何か外にあるものとされていると思うのです。しかしそういう外に存在する魔的なものの出でてくる源は何かということも、問題だと思います。やはりそういうものの源は、結局われわれの内面の内深くにあるのであって、それが外に投射されて、魔靈とか鬼とか魔とかいう形で表象されてしまっていると思われます。ですから、魔靈や魔をそういうものの出でてくる源としてのわれわれの心のなかの問題としてとらえるならば、いくら時代が変わり科学が進歩しても、魔の問題は決してなくならないと思うのです。

私がこういう魔の問題にぶち当つたのは、自分自身のそういう内面の、宗教的自覚の問題としてですが、そこからいいますと、聖書や仏伝に書いてあつたり、あるいは未開宗教や民間信仰でいわれている魔の問題が、逆にそういう内の角度から理解ができるのではないかと思うのです。ですから、裾野と頂点とか、広い全体とその中心とかいう場合に、おっしゃるようにこの両面はどう

しても切り離すことはできないので、やはり広いひろがりを十分に見届けなければならないと思います。ただ、さまざま形の魔の出所は、われわれの心の内面にあるのではないかということと、それからもう一つは、今日までの宗教の歴史を顧みると、どうして魔の問題になってしまいます。おび今後の人間の宗教的な自覚の問題として考へる必要があるということ、少なくともこの二つの点が私には大切に思われるわけなんです。

この第二の点は、この論文の終わりのほうにちょっと書きましたけれども、近代以後のわれわれにとっては理性の、自律ということがどうしても問題になつてきますので、今日、宗教的な信仰とか悟りとか、あるいはキリスト教的な信仰とかいつても、やはりカントなどがはつきりと基礎づけたような理性のアントロジーということを除外しては、われわれの問題になりえないところがあると思うのです。そういう理性の自律ということとの対決において、信仰とか悟りとかを問題にした場合に、いままならあらわし出てこなかつたような問題が、あらわに表面に出てくるということは避けられないのじやな

西谷 それはそうだと思います。だから、さつきはかりに裾野といいましたが、べつに頂きと切り離す必要はない。裾野のいろんな問題は、結局、帰するところはわれわれの内心の問題である。各自に自己自身の生存的な問題ともいえます。また、その内心の問題となる時に、自己と神、仏、魔といふものとの関係が初めて宗教という領域の問題といふ意味をもつてくる。そこが問題の中心で、周辺に起る問題はすべてその中心から放射されてくる。中心の投影である、と見ることができるわけです。そういう見方というのは、いろいろ多くの問題を根本へ集中し、深く透視しようということですが、それと同時に、その見方と切り離せないけれども、逆の方向からの見方というか、いろんな問題はみな外の世界から起つてきて中心へ向かっているという一面もあると思うんです。問題は絶えずあらたに起るいろんな現象、それの事々物々のなかにある。魔といふ問題なら、原始未開の時代から、科学の発達しない以前に、人間が自然界の圧力のもとで、自然の暴力とでもいうようなものに絶えず曝らされて生きていたということが背景にあります

すね。自然の恩恵ということも、もちろんあります。と  
もかく自然現象の背後に、自分の手の届かないところ  
に、自分を超えた強大な力があつて、それが日月星辰や  
地水火風を通して、善であつたり悪であつたりして、自  
分達の生活を支配してくるというようなことですね。

**阿部** 恵みを与えるものと災いを与えるものとがある  
……。

**西谷** 外の世界の自然現象をそういうふうに見る。こ  
れは一つの自然解釈ですけれども、その解釈が同時に人  
間の自己解釈ですね。獲物がたくさんとれたとか、病気  
になったとか、その他何でもいいわけです、すべて、よ  
い場合でもわるい場合でも、なにか或るかくれた力との  
連関のなかで解釈する。これは人間の自覚の形態で、自  
己の存在を解釈することです。だから結局、あなたが中  
心のところで問題にするといわれたことも、裏から見ると、同時に世界という広い場の只中で、あらゆるものと  
のつながりのなかで……。

**阿部** それらとのつながりを離れてはいない。

**西谷** 中心から周辺への放射という方向と、外から内

を人格として自覚する道が実践理性の自律ということだ  
ったわけです。

これは倫理の領域のことですが、しかしその背景には  
外の自然の世界に関する問題がある。世界の問題はカント  
では、自然科学との関係から自然認識の問題だったわ  
けで、理論的理性の領域での人間の理性の自己省察とい  
うことだった。それは人間の主体的な自覚というような  
道として出されたといえます。いうまでもなく、それは  
一方では、自然現象として経験に与えられた対象を認識  
し得るという可能性の先驗的な根拠を究明する意義をも  
含んでいた、といわれるわけです。その純粹理性の批判  
ということは、他方では、それまでの形而上学のよう  
に、超経験的な、そして宗教と共通な立場から、神とい  
うようなものとの関係のうちで世界を捉えようとする理  
性の越権に対する批判でもあった。神とか靈魂それ自体  
の不死なる本質とか、自由それ自体すらも、理論的な認  
識や実践的な認識の対象にはなりえない。しかしただ実  
践理性の立場からはその可能性が確実性をもつて保証さ  
れるとされた。つまり、カントでは理性の問題には、自

への影響、周辺からの響きが中心に来るという方向とが  
一つになつてゐる。

そういうことが一番はっきり現われているのは、現代  
のいろいろな問題のうちにではないかと思います。例え  
ばあなたのいわれた理性の自律という問題、これは現代  
の問題というよりも近世、又は近代の問題というべきか  
と思いますが、しかしもちろん現代にまでつながつてい  
る問題です。理性の自律といふことをカントがいい出し  
たのは、実践哲学の領域で実践的理性ということに関し  
てだつたわけですが、その後では、ニュートンに代表  
される自然科学というものの世界像、乃至は世界観とい  
うことが問題になつてゐた。自然科学的な世界の因果必  
然性と人間の本質に属する「自由」との間の問題です  
ね。そして実践哲学の領域の内部でも、人間のなかの自  
然な本性から出る傾向、心が自然にそつちへ引かれて傾  
いて行く方向がいつもある。カントのいうナイグリングが  
ある。人間の欲求がその傾向性に引かれて、その時その  
時の好き勝手な方向に動く。そしてその恣意を人間は自  
由だと思い込んでゐる。その迷蒙を破つて、人間が自分  
然科学の世界像、それも自由を排除した機械観的な必然  
性の世界と、人間の自由と信仰という宗教的な立場との  
確保といふ複雑な問題群が背景にあるわけですね。こん  
なことは、長い間カントを研究されたあなたに改めてい  
うこともないのですが、ただ現在に問題とされている神  
と悪魔或いは魔という問題に、理性の自律といふことが  
絡んでゐるといわれる。その理性の自律といふことが頂  
上の問題であると同時に広い裾野の問題でもあるのでは  
ないか、と思ったので引合いに出したのです。

現代では、あなたの場合もそうだと思いますが、理性  
の自律といふものは、カントにみるように、全体的な問  
題を解く鍵ではなくて、問題全体の一部になつてい  
るわけです。もちろん、問題の最も重要な、不可欠な一  
契機といふことですが、現代ではもつと端的に、たと  
えばマルキシズムですね。存在が意識を限定するとい  
う立場だから、倫理のよう人に間の道德意識の上で善とか  
悪とかいつて、人間は自分が悪いんだとか、自分の心の  
問題だと見なしているけれども、じつはこれは意識の基  
礎にある存在の問題だ。「存在」というのは結局、生産

力とか生産関係とかにおける物質上の事柄で、人間の社会関係に反映された形では資本と労働ということですね。もっと具体的にいえばブルジョアとプロレタリアという階級的関係で、これは社会構造の問題で、現代なら、近世以来の自由主義と資本主義、他方では社会主義と共産主義で、政治的経済的な問題です。だから善とか悪とかいつても、それは倫理や宗教なんかの問題ではない。人間の心とか主体といつても、本当の主体は（マルキシズムでは一般にはそういうませんが）意識的主体の基底にある「物質」である。「歴史的物質」であるということになる。こういう社会観や歴史観をもった「科学的」な唯物論は、自然科学が昔からの自然学（Physica）の近代版であるように、昔からある唯物論哲学の近代版で、現代でも非常に強い影響力をもつた考え方でしょう。それは宗教否定の無神論だから、仏も魔も問題にしない。しないけれども、社会が変革されれば、人間の意識も変革されて、倫理は社会正義として実現され、旧い倫理の基礎であった宗教は自然消滅するというわけです。

もちろん、この立場も、宗教の側から見れば、さつきことになる。こういう社会観や歴史観をもった「科学的」な唯物論は、自然科学が昔からの自然学（Physica）の近代版であるように、昔からある唯物論哲学の近代版で、現代でも非常に強い影響力をもつた考え方でしょう。それは宗教否定の無神論だから、仏も魔も問題にしない。しないけれども、社会が変革されれば、人間の意識も変革されて、倫理は社会正義として実現され、旧い倫理の基礎であった宗教は自然消滅するというわけです。

るかと思いますが、そういうものを全く問題にしないところで無分別智がいわれている。しかしそれでは眞の無分別智とはいえない。しかし自律的理性との対決に入つた時、従来真とされていた無分別智は眞のそれとはいえないということが明らかになってしまいます。ここに眞に絶対でないものを絶対とするという「魔」の問題が入つてくると思います。これをもし頂上の問題といえば、裾野の問題としては、今度はこのような純粹分別知の立場、自律的理性の立場が科学や日常の場面で自己の純粹性、自律性の故に自らを絶対視する。このように自らを絶対化する純粹分別知や自律的理性は、本来無分別智に席をゆずるべきであるのに自らを絶対化することによって「魔」という性格をおびてくる。マルキシズムなども元來一種の社会科学の理論でありながら宗教を否定して革命による人間救済を主張するところに一種デモニッシュな性格をもつてくるのではないかと思います。

西谷 マルキシズムも前世紀に成立したもので、現在では過去のものということですが、未来に尾を引いている問題でもあって、宗教にとって外の問題ながら、人類

の将来、人間の将来に深い係わりのある事柄です。

阿部 たしかにそうですね。外の問題自身がやはり時代的に非常に変わってきていますし、ある意味では外の力が強まっており、状況は前よりはるかに複雑なものになっている。

キリスト教では悪魔はもと天使であったといいますね。しかも三大天使の一人であつたルチファーが、神の位を篡奪しようとして堕落され悪魔になつたといわれますね。悪魔とか、ダス・デモニッシュといわれるものの本質は、元來眞の絶対でないものが自らを絶対の地位に高めようとするところにある。このことは先生のおっしゃる頂上の問題——いまの場合は天使の墮落としての悪魔——から裾野の問題まで相通ずるところがあると思われます。ティリッヒなどもナショナリズムやコンミニズム、あるいは科学的なヒューマニズムも、それが自らを絶対化する時、デモニッシュな性格をもつてくるといつてるのは、裾野の問題としてのそれだといえるのではないかと思います。

科学一般についていったような意味で、現代における「魔」の新しい現われとして問題になるということは可能でしょうね。そうなるとやはり内の問題と切り離せないところで問題になってしまいますね。

西谷 マルキシズムも現代における「魔」の問題の一つということになります。

阿部 さきほど、理性の自律ということが、頂上の問題であると同時に広い裾野の問題でもあるというお話をありましたが、この理性の自律といふことを仏教に即して考えてみると、こういう問題が出てくるのではないかなと思うのです。仏教でよく分別はいけない、無分別智にめざめなければいけないといいます。その場合仏教は分別知を頭から否定されるべきものと考えて、それはもつ積極的な意味や役割を十分考えていない。理性の自律というのは、ある意味では純粹分別知の立場ともいえ

## 六、魔のキャラクター

西谷

あなたの「非仏非魔」といわれる段階では、やはりこれまでの伝統的な宗教というものから一步はみ出しているけれども、それだけ一層、宗教なんかを問題にしないような現代の状況と結びついてくると思いますね。それで、魔の主体的な自覚とさつきいわれた場合の魔というのは、どういう性格のものと考えたら……。

阿部 私としては、魔の存在、ということではなく、どこまでも魔の自覚、ということで問題にしたいと思うのです。その場合、魔の自覚というのではどうもぴったりとこない。どうしても魔の自覚ということになるのです。魔といふと、神と魔といふ形になり、その場合、魔はさつきおっしゃったように、神にたいする一つの否定原理であり、対抗原理であり、しかもキリスト教の場合だと、神自身は非常に倫理的・宗教的な性格が強いですね、「義なる神」ということがありますから。そこで悪魔のほうも、さつきのお話のように、善惡の悪のほうの最大級のものという形になつてくるので、そういう

によって超えられるというのではなく、仏と魔が同体未分であるということ自体を対的に自覚し、それを超えて仏に非ず魔に非ずという絶対無立場に徹するために、神が優越するキリスト教的な魔の自覚ではなく、仏魔同体をふまえた仏教的な魔の自覚を、不可欠の契機とするわけです。

西谷 つまり、さつきいれたニュートラルな性格ですね。もちろんそれでも、仏との対性などはあるわけですね。キリスト教の「神」と仏教の「仏」いうものの間に、絶対者としての性格の相違があるわけだから、その相違が魔の上にも反映しているとも考えられますね。仏教では仏と魔は善と悪として割り切つてしまふことも出来ない理由がいろいろある。その点で『臨済錄』なんかの場合は典型的です。しかし仏教全体としてみると

いう倫理的な次元を脱却した、より存在論的な性格をおびた魔とはかなり性格がちがつてきます。

それともう一つの点は、キリスト教的な世界では、悪魔は神の対抗原理ではあります、最終的には神によって克服されるべきものという前提がありますね。窮屈的には神によって克服される。ですから両者の間に非常な緊張関係がありますが、そこには神の優位といふことが一貫して根柢にある。それに対して仏と魔という場合には、必ずしも善惡の倫理的な意味合いが濃く、生死とか、有無とか、迷悟とか、空とか、即とかいう問題がからみついています。また必ずしも仏によつて魔が一方的に克服されるべきものというふうには考えられない。むしろ仏魔同体、仏魔未分というようなところがどこかずっとあって、問題がより深く把握されていると思うのです。

それで、仏の裏にはいつも魔がひそんでいる。その意味では、魔は仏の反対原理ではあるのですが、神が悪魔に優位しております、神と魔の対立は最終的には絶対の神に優位しております。

仏教には別に、阿修羅というのがありますね。阿修羅というのはもとはイランの宗教の神の名前でしようね。それがインドへ入った時、異教の神だから、あばれん坊の魔という程度で悪者にされたのでしょうか。似たような事はどの宗教にもあるわけですが、しかし阿修羅というものは戦争ばかりやつているけれども、魔とはちがう。

阿部 ちがいますね。阿修羅には二つの性格があって、真理を追究する若者というのと、戦いの神というのとがあるようですね。奈良の興福寺にある阿修羅の像なんかは、求道的な、つまり真理追究者というほどのシンボルらしいですが、同時にまた手が六本か八本かあって、神特に帝釈天と戦う者だといわれていますね。

西谷 オリエントといわれる地域は古くから、たくさん

んの民族が接触した場だから、神々も戦闘的だったのか  
も知れませんね。ヘブライ人の宗教がそうで、その後の

キリスト教でも古くから「戦う教会」ということがいわれ、凱歌をあげる教会といふこともいわれた。

阿部 チャーチ・ミリタントですね。

西谷 それはともかく、仏教でも地獄というのが六道のなかでいちばんすごいけれども、キリスト教だとサタンというのが大魔王で、ダンテの「地獄篇」でも地獄のいちばん深いところにおつて地獄に君臨しているのに、仏教では大魔王みたいな観念があるのかどうか。提婆達多みたいに釈尊に敵対して地獄に落ちた罪人や、獄卒としての鬼はたくさんいるらしいから、大魔王がいてもいい筈だが、大王はむしろ閻魔大王で、これは裁き、審判を司るだけですね。

阿部 やはり善惡というか、道徳というもの自体の考え方方がキリスト教と仏教とではちがいますね。仏教では善惡が相対化されていますね。極悪人で地獄におちても、永遠のパニッシュメント（罰）ではなく、なお何か救われる余地がある。そういう考え方方が、仏教の地獄や

閻魔のイメージに影響していると思いますね。

西谷 それにしても、真宗などの浄土教になると罪業という概念が強いから、地獄に落ちるということは若干キリスト教と共通のような感じも出てくる。その点は禅宗などが専ら悟りということを問題にして、「天堂」や「地獄」を窮屈的なものと認めないと、基本的な違いが出てくる。しかし、禅宗のほうでも魔ということを問題にしたり、地獄というものを問題にしたりしていることは、よくありますけれどね。

阿部 私これも先生にお伺いしたいんですが、原始仏典ではマーラという悪魔がさかんに出てきますね。お釈迦さんの成道のときとか、成道以後でも、しばしばお釈迦さんに現われている。それから涅槃經などの大乗仏典、そのほか、天台とか禪ではさかんに魔が出てきますね。ところが浄土教関係の經典にはほとんど魔という問題が出てこないのです。たとえば親鸞の場合でも魔界外道という言葉は出てくるけれども、それから『教行信証』の「化身土の巻」のほうにちょっと魔の問題が出てきますが、それは非常に周辺的なことで、そのかわり罪

という問題は「罪業深重」ということで、非常に強烈に出てきますね。浄土教では、ほかの仏教とちがって魔の問題がそれほど明確には出てきていません。むしろ

罪ということに重点がおかれていて、それまでの仏教で魔が問題にされたような宗教的基盤が変わってきているところがあるのではないかと思うのです。それだけに仏教一般というか、原始仏教や天台や禪の場合の魔の理解というものは、罪とか、それにかかる倫理的な善惡ということと一應別個の角度から、つまりもつと宇宙論的、存在論的な基盤の上で出てきているのではないかと思うのですが。

## 七、悪と罪と魔

阿部 それから悪と罪と魔というのは、それぞれその成り立つディメンジョン（次元）がちがうのじやないか。もちろん互いにつながりはありますけれども、しかし同じ次元で理解することは出来ないと思うのです。また、悪と罪と魔の間には、単なる程度の違いでなしに、質的な違いがあるのではないか。その質的な違いを明確にし

ないと、いろいろな問題がはつきりつかめないのではないかと思います。

たとえば善惡の区別、対立ということとは、人間対人間という倫理・道徳の立場だけでも十分成り立つ問題だと思いますが、宗教的な意味での罪の問題は倫理道徳の立場だけでは出てこないと思います。罪の問題は、神とか仮とかいう、超越者とのかかわりなしには出てこないので、人間対人間ではなく、人間対神という次元で初めて出てくる問題だと思います。ですから、かりに善惡対立の根もとにあると、カントなんかがいう根源悪というような問題も、神との関係に入ることなしにいわれている限りは、なお罪の問題とは次元を異にしているといわねばならないのではないか。非常に鋭い良心の立場で、自分の行う善の裏にもつねに悪がひそんでいるとして根源悪を深く自覚する場合でも、それは神をはなれても成り立つと思うのです。けれども、その根源悪がさらに罪として自覚されるには、そういう良心の立場がさらに神の光のなかで照らされるとか、その人が仏とのかかわりに入るとか、いうことがなければならぬ。しかしこの罪の

自覚というところでは、まだ魔という問題は出でこないと思うのです。その罪が救われるところ、罪が恩寵や慈悲によって、救いに転ぜられて、パウロでいえば、罪のいや増すところ恵みもいや増すという、そういう神の立場を信ずる信仰を通して神と一つになるという所まで来たときに、初めて、そのような神に対抗するものとしての悪魔、あるいは魔というものが、ほんとうの意味で出てくるのだと思います。つまり人間対神という次元をもこえたところで初めて悪魔とか魔という問題が出てくる。悪も罪も魔も、すべて否定原理であるということでは共通していても、それが出てくる次元ははつきり区別すべきところがあるのでないかと思うんです。

ですから、悪魔は決して最大の悪人ということではなくて、最大の悪人をもはるかに超えたようなもの、また最大の罪人をも超えたような、それとは別次元に現わるもので、悪人や罪人といわれるものは別個の意味を、悪魔はもつているといわねばならないと思うのです。ですから罪人をこそ救うという神が出てくる次元に至つてはじめて、ほんとうの意味で悪魔の問題が出てく

るのではないかと思うのです。そういう点はどういうふうにお考えになりますか。

西谷 だから、そのことにはさつきいって「魔」という概念についての問題が絡まっているわけですね。先ず、悪と罪と魔の次元の違いといわれたことから考えて

たとえば「神」という観念の場合でもそうだと思いますけれども、問題の頂点へいくとキリスト教でいう神の観念などが内容的に問題になつてくる。キリスト教では、その背景に旧約聖書に出でているようなイエス・エルの宗教の長い歴史があり、同時にギリシア・ローマ文化、特に倫理や哲学の接触があって、神の観念が非常に高度な発達を遂げたわけだから、神の問題がつきつめられるとそれの内容が問題になつてくるのは当然です。しかし一般宗教史や宗教学の立場から、キリスト教とか仏教とかいう高い次元でなしに、もっとそれ以前の段階から考えていくと、そこでも神という観念は既にいろいろな次元で考えられているということがあるわけでしよう。神というのは非常に一般的な概念で、たとえば

日本語の神という概念でもそうですけれども、すべて神話に出てくる神は、山の神、河の神、日月星辰、地水火風、その他あらゆる種類の「もの」が神になるし、鍛冶の神、音楽の神などあらゆる技術・芸術の神がある。何の神は無数にある。また人間の英雄も死後に神として祭られる。要するに、神とか「神的なもの」とかいう概念は非常に広くて、いわゆる汎神論的です。この神話的な神観念は、古代の進歩した文化の国、インドや中国、ギリシアやローマその他では普通だったといえます。そしてこういう神話的な神観念の次元で、その神との連関のもとに、悪とか罪とか魔とかが考えられていた。例えば罪悪ならば日本神道の「まがつみ」というような意味合いで、また魔ならば、前にいったダイモニオンというようなのがその例です。

そういう神話の世界は、その後に現われた知性の目醒め、或いは啓蒙された「理性」という立場からすれば、俗信とか迷信とかといわれたわけですが、私はその見方には賛成しません。むしろブルトマンが神話の「実存論的解釈」を通しての「非神話化」とよんだような方向で

解釈すべきだと考えていますが、ここではその議論には立ち入ることは出来ない。ただ、その知性の目醒めによつて、神話の世界は論理と倫理を含んだ広い意味での哲学が支配する世界に移行して、新しい次元に進む。これはギリシアでもインドや中国でも起つたことで、人間の新しい自覚です。その次元では理性の立場から眞偽や善惡の明晰判明な規定がだんだん為されて来て、神の概念もそれを踏まえたものになつて行きます。そこから見て、神話の世界での神観念や悪、罪、魔の観念は規準にはならない。その意味で俗信とか迷信とかともいわれてくるわけです。この転換は決定的で、西洋ではソクラ特斯やプラトンから始まるわけですが、そこで始まる哲学の立場は、現代に到るまで続いています。さつきのお話には、カントのことが出て来ましたが、カントの宗教論は、理性の限界内での宗教の論で、根本悪は語られていますが、原罪は出でこないし、サタンも出で来ない。哲学ではそれは神話で理性の立場での規準にならない。それを規準にするのはキリスト教の神学で、キリスト教の信仰箇条（宗教としてのドグマ）を基礎として前提した上

での弁証です。カントは、さつきいわれた理性の自律を基礎にしている限り、信仰とそのドグマを基礎にすることは、神話への逆戻りと考えた筈です。

そこで、さつきの、悪と罪と魔との間の次元の違いと

いうことですが、悪は人間対人間の関係を出でていな

が、罪は神と人との関係の上での問題で、一方は倫理的、他方は宗教的で、その違いは質的である、ということでしたね。罪とか罪業とかは、自分が神或いは仏に対する「おそれとおののき」のうちで罪が自覚されるという意味でしょうか。ところで罪は自分自身の力では脱却できない。神が怒りを鎮め、神が宥すということがなければならぬ。ひとえに神の、または仏の側からの救済の力とそれへの信仰によつてのみ救われる。神とか仏とかの恵みである救いのもとで、自分が悔い改めてその神または仏を信ずる。この救いの自覚である信仰が第三の次元で、罪の自覚の次元と質的に違うといわれる。罪のいや増すところ恵みもいや増すということだから、それは罪のおそれとは次元の違つたよろこびでしよう。(ただ、

の展開だとすると、そのためには、例えばプロテスタンの信仰者とか真宗の信心家にならねばならぬ、ということなのか。それが、理性の自律といわれる自覚に立て、一切の信仰を規準にすることを拒否して来た者に可能であるか。可能であるとすれば、如何なる仕方ですか。そういう問題が一つあります。

倫理的な悪の次元から宗教的な罪及び魔の次元へといふ図式は、はつきりしていますが、しかしそれが、理性の立場から信仰の立場へ、という意味を潜めているので、問題が出てくるのだと思います。というのは、さつきもいつたように、啓蒙された理性の成立が、人間における根本的な自覚であつて、その意味で一つの決定的な転換であつたから、それが信仰によつて超克されることは容易にはできないからです。プロテstant神学のうちからは、哲学や道徳を含めて理性の立場が信仰への道の障害となるから、それを放棄することによって信仰への路を開くという道がよく説かれたが、それは永続的な成功はかち得られませんでした。理性から宗教とその信仰へという飛躍の可能性が確立されるためには、その飛

そのよろこびのなかにも、いや増す罪という自覚もある筈で、そこに罪の自覚の完成があるとはいえないかとも思います。)この次元で魔が考えられていますが、それについては後であります。

これは非常にはつきりと筋の通つた論で、それとしては充分理解できると思います。ただ一つお聞きしたいのは、次元の違いといわれることについてですね。悪の場合は人間と人間との関係という倫理の次元で、これは普通人間性についての事柄ですね。良心といわれていることも、どの人間の本性にも係わることで、すべて一般倫理学や道徳哲学の問題です。ところが罪及び魔は宗教の次元のことですが、この宗教は信仰中心的だから或る特定の、固有名詞で呼ばれる神とか仏(エホバとか阿弥陀仏とかのような)へのパーソナルな関係で、いわゆる絶対他力的な宗教ですね。そうすると、具体的には、例えばキリスト教、特に新教的なそれか、又は浄土門仏教、特に真宗的なそれ、というような、何か或る特定の宗教の信仰に入ることにならないでどうか。

悪の次元から罪の次元へ進むのが、人間の宗教的自覚

躍の軌跡がなんらかの仕方で構成的に構築されることが必要です。これはかつてカントが遂行したような意味での「図式論」の構築で、方法論上の問題ですが、理性と信仰という問題では、とてもむつかしい筈です。しかし例えばキエルケゴールが『哲学的断片後書』で、宗教的意識の分析のなかから、宗教性Aと宗教性Bとの区別と連関を開拓したこと、他方で、神学的な教義論の領域の内部に、「第二哲学」とか「第二倫理」とか彼がよんだけのような場を開こうとしたことなどは、見方によつては、そういう図式論のための準備工作と解されないこともあります。現代のブルトマンとその学派、或いはティリッヒの業績などのうちにも、同様な意味を認めることも出来るかも知れません。

最後に、第三の次元で魔が救済の神への対立者として、真に魔として、現わることですが、これも理解できる説です。同時に、魔も神と同様に、一般宗教史の原始的段階からいろいろな形で現われているのが、あなたのいわれた頂上のところでは、魔がその悪や罪よりも高次な、もっと根本的な力として、神の最も高い形

に対立して現われる。しかし同時に、他方では、悪や罪よりも以前な、プライマリーなものとして、はじめから考えられていると見ることも出来ないことはないです。そういうことがあるから、頂上では神に対立して悪魔として現われても、その裏に原初的な性格を含んでいるものという形で解釈して行けるんじやないかしらとも思います。

**阿部** 倫理的な魔の次元から宗教的な罪および魔の次元へすすむという場合、そこに信仰の立場が入ってくることになるのではないか、又そこには信仰と理性の対立葛藤という問題が介在するのではないか、というお話をいますが、罪ということが自覚されるところでは、当然信仰という立場が入ってくると思います。そして理性、特に近代的な自律的理性の立場との対決に入った時、中世的な信仰ではそれが真実とされていたことも、自律的理性を撥無している限り、眞の眞実とはされないで、眞実のまま、虚偽だと自覚されることは見えないと思うのです。ここに魔の問題が入ってくるわけですが、私自身としては、このような信仰の立場にからまる魔の

**西谷** 暗昧なことになるかも知れませんが、まあデーモン的というか……。

**阿部** デーモン的なものですね。むしろそれが人間にとつていぢばん根柢的であつてそれの一つの特殊な、つきつめた形がキリスト教的な魔とか仏教でいう魔とかいうことになる、というお考えですね。キリスト教の魔とか仏教の魔は、そういうデーモンとは、違つていますね。

**西谷** 非常に違つたニュアンスをもつてますね。

**阿部** そうするとキリスト教的な魔や仏教的な魔とはさらに違つたような、非常に広くて、しかしあ底の知れないようなデーモン的なもの、人類すべてに通ずるような暗さとしてあるデーモン的なものを別個に考えなければなりませんね。先生が昭和三十三年頃にお書きになつた「倫理を超えるもの」(筑摩書房『講座現代倫理』I所収)という論文では、魔的なものとダス・デモーニッシャー(魔神的なもの)とは区別する必要があるとおっしゃつているんですけれども(笑)、そのダス・デモーニッシャーというのと、さつきのデーモンというのとは、同じことに

問題の他に、悟りの立場にかかる魔の問題も、少くとも同等に重要な問題だと思っています。実はこの「非仏非魔」という論文でも、信仰の立場にからまる魔の問題よりも、悟りの立場にかかる魔の問題に、より多くの頁をついやしたわけです。そして悟りの立場での魔の問題という時には魔とか罪とかいう問題よりも、死とか無明、更には空の自覚への執れ、法身の自覚への執れ、といふような問題が出てくると思うのです。それについては、またあとでやれる機会があるかと思いますが、さきほど最後におつしやったのは、魔や罪より高次などいうより、むしろ、それより以前の原初的な意味での魔をも問題にする必要があるのでないかという御指摘であったと思います。つまり先生のおつしやるのは厳しい意味での倫理とか宗教とかいうものの以前のところでの、もつと生な生の次元で問題となるようなもの、例えばさつきのデーモンとか、あるいは鬼とかいうようなものですね。

## 八、ダス・デモーニッシャー

なるわけでしょうか、どうでしょうか。

**西谷** 概念は同じです。ただダス・デモーニッシャーという場合は、とくにデーモン的な性格に重点を置いて、その面を強調して使われる。その時には、divine(神的)或いは göttlich(神的)なものという概念に対して、それと違つた、「魔的」又は「魔神的」な性格のものという概念として、近代によく使われて来ていますね。原語であるギリシア語でも、そういう違いはあって、「神的」(theios)なものに対して、片方はデーモンという。「神的」のほうは、キリスト教ほどではなくても、なんとなく人格的な感じがあるらしい。ちょうどギリシア神話に現われた神々が、非常に人間的な神ですけれども、人間のもつてこないような美しさをもつていると、威厳や威力をもつてているというような、そういう性格でしょう。ギリシア神話の神々は民族の文化と結びついているからすでに高級化したもので、そこへいくとデーモンというのは、なんとなく人格性の方向にはつきり自覺化されきれないので、人格以前的な感じのものでしよう。そういう存在として、どこか、無意識性というか盲目性というか、と

にかく怪しげな暗さを含んでいる。そのかわり善い悪いの分別の見境ももたないようなもの、それ自身の相も善いのか悪いのか区別もつけにくいようなものということでしょうね。神々のほうはそれとはちがって、キリスト教の神などについていわれる精神的な品格、神としてのパーソナリティ、今までいかなくとも、とにかく人格性をもっている。だから「擬人化」されている。そういう擬人化以前の、人間以前的な相をもつているのがデーモンの感じ……。

阿部 ダス・デモーニッショもそうですか。

西谷 ダス・デモーニッショ（デーモン的なもの）も多くの場合、或る人間のうちに含まれている一種の超人間

的な、しかし人格性以前のものという暗さをもつた力についていわれているわけだけれども、しかしそれは人間の奥にある自然性から出てきたという感じでしようか。日本でいうと、どういう言葉になるかな。たとえば……

阿部 邪鬼……。

西谷 邪鬼はどうかな。<sup>まことに</sup>天の邪鬼ならまだいいが。むしろ、さつきあなたのいった「鬼」。<sup>おき</sup>なにかを一所懸命

になつてやる時、あれは学問の鬼だとか、事業の鬼とかいう、その感じに近いですかね。

阿部 何かに憑かれて。

西谷 盲目的といえるほどの集中力をもつて、われを忘れてやつてはいる。熱中している。そういうことだから、いろんなことを考えたり、反省したり、ぐずぐずしたりしない。近ごろの言葉でいうと、無意識といつたり、深層心理といつたりする、そういう処から出てくるような氣力。生命の奥から出る「気」の力。なにかそんな感じのことが、デモーニッショ（デーモン的）ということにはあるんでしょうかね。「魔」とか「鬼」とかいうのにもそういう一面があると思いますね。

阿部 先生のこの論文でおっしゃっているのは、悪魔とかトイフェルは、人間の倫理的、宗教的な生き方において、神への方向から倫理以前の次元へ人間を引き降そうとする力であり、神的なものに対する消極原理というか、否定原理として考えられるけれども、ダス・デモーニッショは、神への方向と本質的に全く別な方向を開く立場で、たとえば神にたいする罪の意識を否定するよう

な立場であり、人間が神に背く罪を感じるのもとになるようなものを自覚的に拒否して、それと戦うような方向で人間が自己を肯定するという、そこにデモーニッショなものが出てくる。これは虚無を主体化する真の無神論の立場というものとのつながりにおいておっしゃっておられるので、自覚としては非常に高いところでの話ではないかと思いますが。

西谷 その場合でも、一応は自覚的な立場だけれども、やはり自我意識というような反省的なものを超えた、もつとそれ以前の直接的なものを、自分の底に、自分ほんとうの力として見ていくというか、そういうことをだと思いますね。それで、もしさつき挙げられた私の論文で私が罪ということを問題にして、デモーニッショなものが罪の意識というものに反抗するというふうにつたとすれば、それは多分、罪というものの根本がやはり自我意識、つまり「われ」、エゴというものの自身にあるからでしょう。自我意識ということが、神から離れ去るとか、神に叛くとかいう方向を含んでいます。アダムが神に禁じられた知恵の木の実を喰つたので、楽園から追

放された、それがアダムの原罪であつて、人間界のあらゆる罪の源泉であるといわれる。ところが、デモーニッショというのは、むしろその自我意識のもうひとつ奥にある、今でいうと深層心理とか無意識とかの領域にあって、自然と直結した生命力とでもいいくべきもの、それを肯定的に見たのがデモーニッショということでしょう。あなたのさつきいわれた人間理性の自律性ということとは違つた、むしろそれと対立的なものです。けれども、人間の主体的な自覚の方向としてはそれと結びついています。

阿部 それは、同じ主体的な立場であるといつても、倫理的宗教的な方向とは正反対な方向に立つもので、倫理的宗教的方向に對してネガティヴといふか、それを裏返したようなところでの主体的自覚ですね。

西谷 そういう方向を肯定するという立場ですね。主体的自覚を神への罪とは思わない。科学者が科学する時の思考活動、技術者が技術を働かす行為、それらも人間の主体的自覚の現われですが、やはり罪の意識と結びついていません。それ自身としては全くニュートラルで

す。しかしそれらは人間的意識という反省又は対自性の次元に現われるものだから、デモーニッショとも違います。両者の間に、「知性」の明るさと「無意識」の暗さとの違いがあります。ただ、さつきいったように、科学や技術の働きのもう一つ奥には「魔」的なものが潜んでいるということも、現代における魔の問題です。

### 九、倫理を超える二つの方向

阿部 この「倫理を超えるもの」という論文では、先生ははつきりと相反する二つの方向に倫理を超えたものを考えておられるのです。一つは倫理を超えて宗教へといいう方向で、そこでは罪とか神とか悪魔ということが必要的に問題になつてくる。それからもう一つは、宗教と正反対の方向に倫理を超える行き方で、そこでは、神の非存在としての虚無を主体化することにより自己肯定するようなデモーニッショな方向という、二つの方向を分けて考えておられる。

西谷 それは一応分けられると思います。

阿部 最初の、宗教への方向というのは、わりとはつ

す(笑)。ぼくには、現代のいろんな問題を考える場合に、抽象的な神と人間の罪というだけの枠組では余り抽象的で、近代の人間のもつてているいろいろな問題は汲み取られ得ないのではないかという、そういう気持ちが前からあつたわけです。それで、近代の人間が無神論にならざるを得ないという傾向の根本に、今あなたが挙げられたようなデモーニッショなものへの方向があると考えたと思います。

それは神に対する魔魔というより、古代のデーモン、「魔」ということで言い表わされる方向ですが、それとは別に、臨済のような場合は、今まで話してきたようなコンテクストのなかで一体どうなるんでしょう。この場合も、魔魔というよりはデーモン(魔神)に近い感じがあります。さつきデーモンは反省以前的で盲目的なところがあるといいましたが、臨済の場合、或いは広く仏教の場合、「魔」が單に盲目的といつてはいけないでしようが、しかしやはり自我意識の枠を踏み破ったようなところがある。禅では盲目、「暗」ということが、反語的に、いい意味で使われてもいる。もちろん仏教の場合、仏は

きりしていると思うんですね。とくにキリスト教の場合は、神は義の神であるという面があり、神の徳とか命令とかにそむけば不義である、罪である、という意識が極めて強いですね。そして、それがさらにもう一つポテンツが高まると、神に対抗する魔魔といふことで、サタンとかデヴィルとかいうことがいわれる。これは全く倫理を超えて宗教へという方向で、そこで魔魔の性格といふものは、かなり明瞭だとと思うのです。これに対してデモーニッショというものは、神の非存在としての無神論の主体的徹底において、単に罪の意識が欠如しているというでなしに、罪の意識を自らの責任において否定するというその方向に出てくる。そして何かをみずから「罪」として規定しようとするとその態度そのものと、自分のなかで対決して戦う。そういう意味での自己自身との戦いを通してはじめて倫理以前の自然的なものが、倫理を超えたところでの倫理の否定というところへ高められてくる。そこにダス・デモーニッショということが出てくるのじやないかという……。

西谷 そうですか。それなら今でも同じような考え方で

覚者ですから、やはり自覚という契機が必要なんで、最後まで「覚」ということが貫いているといえる筈です。そういう方向からは、最後には、あなたのいわれた臨済の「非仏非魔」が残るでしようが、とにかく一応、仏への方向が柱としてあって、それに対して魔の方向が対立的に出されてくる。そしてそれは魔魔というのと性格がどこか違う。どことなくデモーニッショに近い。臨済の場合など特にそうです。

仏への方向という場合は、どうしても自己というものを捨てていくことが基本ですね。キリスト教のように原罪の自覚というようなことを通してではないとしても、さつきいわれた生死とか輪廻とか、それと結びついたいろいろなことを脱して、むしろ否定して、涅槃に入る。これは無我の境だが、単なるトランク(恍惚)ではなくて「覚」つまり正覚です。だから我の否定、自己否定の方針が一貫していて、それが真正な自覚の道である。そこに、近ごろの言葉でいうと、「対自性」という契機が入っている。自己否定的に眞の自己をさとるという構造が入っている。それに対して、他方、魔の方向は、それと

違つてもつと「即自的」というか、要するに自分自身のうちにある無意識的で超人間的な力の発動ですね。それが発動する時は、一種の自然必然性をもつて自分のうちに入つてくる。だから、倫理的にもニュートラルで、倫理的な善ではないが、必ずしも倫理的な惡でもない。それはそれなりの独自な性格と意味をもつてゐる。人間が憑かれたように何かに熱中するという場合、その「熱」といわれる力は一種独自なものですね。これにも人間の主体的な自己理解というところがあるから、広い意味で一種の自覚態ともいえるが、あくまで反省以前で即自的だから、正覚という本来的な自覚の方向とは違つた、対立的な方向ですね。臨済なんかが魔といつてゐるのは、そういうデモーニッシュという意味のほうが強いのかもしない。

(以下次号)

(にしたにけいじ・京都大学名誉教授)  
(あべまさお・クレアモント大学教授)